

自己評価報告書(最終報告)

報告者

社会系コース／大石 雅章

■平成25年度の目標に対する自己点検・評価

I. 学長の定める重点目標

I-1. 教員養成大学教員としての授業実践

中央教育審議会は、「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について」答申したが（平成24年8月28日）、その中で「教員を高度専門職業人として明確に位置付ける」と提言している。この答申の考え方を実現するため、教員養成大学に籍を置く教員として、将来、教師を目指す学生に対してどのような授業実践を展開すればよいか。あなたの取り組みを、①授業内容、②授業方法、③成績評価の三つの観点から示してほしい。

1. 目標・計画

高度専門職業人としての教員をいかに育成するかという観点から、常に授業を組み立てる。①授業内容、子どもたちに身近な題材をつかって日本の豊かな内容を持つ歴史を理解させるための能力、それを魅力的に語るなどの発信能力を身につけさせるために、日本史学概論では社会史的な観点から日本史の諸側面を考えさせる授業を行う。日本史学特論(古代・中世)では地域を題材に、文献史学を核にして、考古学・民俗学・地理学等の学際的な研究成果も取り入れながら、古代・中世の豊かな日本全体像を扱う。②授業方法、問いかけなどを通して学生に考えさせ意見をもとめる学生参加型の授業をおこなう。また教採の専門教養レベルの理解を習得させるために自習学習も促す。③授業における態度(質問等に積極的に答える意欲等)、テスト・レポート等における習得度など総合的に判断し、成績評価を行う。

2. 点検・評価

高度専門職業人としての教員をいかに育成するかという観点から、常に授業を組み立てている。①授業内容、子どもたちに身近な題材をつかって日本の豊かな内容を持つ歴史を理解させるための能力、それを魅力的に語るなどの発信能力を身につけさせるために、日本史学概論では網野善彦著『岩波新書：日本中止の民衆史像』をテキストに、高校の日本史Bの教科書を参考にしながら社会史的な観点から日本史の諸側面を考えさせる授業を行った。日本史学特論(古代・中世)では地域を題材に、文献史学を核にして、考古学・民俗学・地理学等の学際的な研究成果も取り入れながら、古代・中世の豊かな日本全体像を扱った。②授業方法、問いかけなどを通して学生に考えさせ意見をもとめる学生参加型の授業をおこなっている。また教採の専門教養レベルの理解を習得させるために自習学習も促している。③授業における態度(質問等に積極的に答える意欲等)、テスト・レポート等における習得度など総合的に判断し、成績評価を行った。

Ⅱ. 分野別

Ⅱ－1. 教育・学生生活支援

1. 目標・計画

①教育面ではⅠ－1で述べたように、教員としての資質を高めるために、実践的な能力が身につくような授業づくりに努める。ゼミ生・受講生等の意見にも積極的に応えるように努める。また四国遍路に関する地域社会支援へのボランティア活動を通じて、学生たちの教員としての資質を高めるよう努める。

②学生生活においては、学生支援担当の副学長として、本学の学生生活の指導とその環境の充実に努める。また教員としては指導学生を中心に学生とのコミュニケーションを絶やさず、彼らが学ぶに支障のない生活環境を維持できるよう、可能な限り支援する。また就職支援においても、より充実した体制作りを構築し、学生たちの就職をかなえるよう努力する。

2. 点検・評価

①教育面ではⅠ－1で述べたように、教員としての資質を高めるために、実践的な能力が身につくような授業づくりに努めた。ゼミ生・受講生等の意見にも積極的に応えるように努めた。また四国遍路に関する地域社会支援へのボランティア活動を通じて、学生たちの教員としての資質を高めるよう努めた。

②学生生活においては、学生支援担当の副学長として、本学の学生生活の指導とその環境の充実に努めた。また教員としては指導学生を中心に学生とのコミュニケーションを絶やさず、彼らが学ぶに支障のない生活環境を維持できるよう、可能な限り支援した。また就職支援においても、より充実した体制作りを構築し、学生たちの就職をかなえるよう努力した。その結果とは単純にはいえないが、ゼミ生4人(学部1人、大学院3人)が教授に正規合格し得た。

Ⅱ－2. 研究

1. 目標・計画

①本学の特色となっている教育実践力を見据えた遍路を活用した教育研究活動をチームとしてすすめる。

②自らの研究テーマである中世寺院史研究をさらにすすめる。それにあわせて、教育においてもその成果を活用できるように努める。

2. 点検・評価

①本学の特色となっている教育実践力を見据えた遍路を活用した教育研究活動をチームとしてすすめている。とくに、若手の准教授の先生方が中心となって教育活動を担う体制が確立してきている。その意味で遍路を担う教員チームの育成と世代交代がうまく進んでいる。

②自らの研究テーマである中世寺院史研究をさらにすすめているが、公務におわれて時間がとれず停滞気味である。何とか研究の時間を確保し、それにあわせて、教育においてもその成果を活用できるように努めたが、研究時間が十分でなくその点反省し、今後の研究活動の反映したい。

Ⅱ－3. 大学運営

1. 目標・計画

- ①学生生活支援・就職支援担当副学長として、その責任を果たせるよう可能な限り努め、とくに専門職業人としての教員養成大学として学生のキャリアアップを目指した教育支援(就職支援)および大学生生活支援をすすめ、その成果が大いに発揮できるよう努める。
- ②第2期中期目標が必ず達成できるよう、学生支援委員会・就職委員会などを通じて学内の運営に努める。

2. 点検・評価

- ①学生生活支援・就職支援担当副学長として、その責任を果たせるよう可能な限り努め、とくに専門職業人としての教員養成大学として学生のキャリアアップを目指した教育支援(就職支援)および大学生生活支援をすすめ、その成果が大いに発揮できるよう努めた。その結果、例年とほぼ同様の教員採用率を達成できる見通しである。また、教員養成特別コースにおいても、学生・教員の努力のお陰で教員採用率が100%を達成できた。
- ②第2期中期目標が必ず達成できるよう、学生支援委員会・就職委員会などを通じて学内の運営に努めた。

Ⅱ－4. 附属学校・社会との連携, 国際交流等

1. 目標・計画

- ①附属学校との実習など含め実践的な教育活動を、副学長として学生生活支援から可能な限り支援する。また教員として、指導学生をはじめ学生の実習などを支援する。
- ②地域に根ざした大学を支える教員として、社会との連携に可能な限り努める。とくに四国遍路プロジェクト等で形成された地域社会との連携やそのノーハーを活かして、大学の社会連携活動を支援する。

2. 点検・評価

- ①附属学校との実習など含め実践的な教育活動を、副学長として学生生活支援から可能な限り支援した。また教員として、指導学生をはじめ学生の実習などを支援した。
- ②地域に根ざした大学を支える教員として、社会との連携に可能な限り努めた。とくに四国遍路プロジェクト等で形成された地域社会との連携やそのノーハーを活かして、大学と徳島県等との社会連携活動を支援した。

Ⅲ. 本学への総合的貢献(特記事項)